

Crofton Black,
Pico's Heptaplus and Biblical Hermeneutics

Brill, 2006, pp. xiv+274, €106

小藤 朋保

十五世紀末のイタリアで活動した学者、ジョバンニ・ピーコ・デッラ・ミランドラは、人文主義的素養を身につけ、大学で哲学や神学を学び、フィチーノらのフィレンツェ・プラトニズムとも係わり、さらにはカバラなどユダヤの学問の知見も有しており、まずもってその博識さにおいて際立っている。彼は一四八九年に創世記冒頭の六日間の創造の記述に関する註解書を著した。これが『ヘプタプルス』である。この著作はピーコ研究で主題的に取り上げられることが非常に少なく、研究書としては本書がほとんど唯一のものと言える。本書では、その表題のとおり、ピーコの『ヘプタプルス』がユダヤ・キリスト教の聖書解釈学との関連を中心にして考察される。

著者ブラックによれば、ピーコは『ヘプタプルス』において、創世記の解釈をするだけでなく、その積義の基礎となる「アレゴリー理論」を展開している。本書はこの理論を主たる対象とし、『ヘプタプルス』を、ピーコのそれ以前の諸著作と聖書解釈の歴史という二つの「コンテクスト」の中に位置づけて分析していく。

ピーコの生涯と著作の簡単な紹介の後に、第一章では、ピーコとユダヤ世界との接点およびその深度の概略が示される。はじめに、ピーコと親交のあった三人のユダヤ人——エリア・デル・メディゴ、フラウィウス・ミトリダテス、ヨハナン・アレマンノ——について検討される。このうち最も重要となるのはミトリダテスで、個人教師としてピーコにヘブライ語を教え、カバラに関わるものも含む複数のヘブライ語文献をピーコのためにラテン語に翻訳している。また、ピーコは著作の中でユダヤの註解者——ラシ、アブラハム・イブン・エズラ、ダビド・キムヒなど——に言及しており、中世ユダヤ教の聖書解釈に関する知識もあったことが確認できる。しかし、ヘブライ語を知っているといても、独力でヘブライ語文献を研究できるほどではなかった。ピーコはキリスト教世界におけるカバラ受容の歴史の端緒に位置する人物の一人だが、ユダヤ思想へのアクセスはあくまでも間接的なものにとどまる。こうした分析を基礎として、本書において著者は、『ヘプタプルス』の背後にある様々な伝統のうちでも特にユダヤ教からの影響を強調していく。

『ヘプタプルス』という著作は大きく三つの部分に分けることができる。まず、第一序文、第二序文、註解の対象である創世記冒頭の文言（1:1-27）の提示から成る序論部、そしてこれに続く本編では、この同じ文言に対して七つの註解（各註解は七章から成る）がなされて、最後に、補遺のような形で創世記冒頭の句「はじめに」に対するカバラ的積義が付されている。第二章では、この『ヘプタプルス』本編の七つの註解の概要が示され、そこで著者はピーコの註解を、創世記の記述と様々な哲学の教義との「アレゴリーによる同定」として総括する。著者によれば、これがアレゴリーによる読解の「実践」に相当し、序論部での議論が、本書の研究対象である「ピーコのアレゴリー理論」である。

第三章は『ヘプタプルス』を取り囲む聖書解釈に関する三つのコンテキストの提示である。まず、十五世紀西欧の聖書解釈を巡る諸状況が略述される。次の世紀に至ると改革者たちの批判を受けることとなる中世以来の四段階の意味に基づく積義学は、十五世紀においては依然として聖書の解釈方法として支配的であった。また、マネッティやヴァツァといった先駆者とともに、聖書をギリシア語・ヘブライ語の原典に遡って研究する文献学的手法が新たに登場したが、そうした態度が一般化するのには十六世紀以降であり、ピーコの時代にはウルガタの正典としての地位が揺らぐことはなかった。これに加えて、当時の出版傾向から、最も一般的な聖書註解の対象となっていたのは、ヨブ記、詩篇、新約聖書であったことが示される。

次に、ピーコが『ヘプタプルス』で創世記を解釈するにあたって「拒否した」権威と伝統に関する指摘がなされる。第一序文でピーコは自身の著作のある種の新奇さに言及し、それ以前の創世記解釈の伝統と自身の註釈書との関係を設定しているのは事実だが、この箇所「拒否」といった強い対立構図を読み取るのは無理があり、著者の叙述はやや誇張されている。テキストに即してピーコの伝統に対する姿勢、つまり自身の著作のどの部分が新しいと主張しているのか、そしてそれは聖書解釈の伝統とどのような関係にあるのか、をより正確に把握する必要があるだろう。とはいえ、ピーコが誰の創世記註解を『ヘプタプルス』執筆当時に知り意識していたかは、確かに『ヘプタプルス』の一つのコンテキストではある。当該個所でピーコは、古代から中世のラテン世界、ギリシア教父、ユダヤ教の三つの領域から総勢三十五名にのぼる聖書註解者を列挙している。この人名リストを著者ブラックは詳細に分析して、従来の『ヘプタプルス』の現代語訳での注に対するいくつかの修正——例えば、ピーコが「エウセビオス」として言及している人物は「カエサリアのエウセビオス」ではなく、「エメサのエウセビオス」ではないだろうかといった——を提起している。

続いて、ピーコによる他の聖書註解と『ヘプタプルス』とが比較される。ピーコは『ヘプタプルス』と同時代に、著作として完成することはなかったが詩篇の註解にも取り組んでおり、それらの断片は、聖書に対するアプローチという点で『ヘプタプルス』との明らかな対照を示している。『詩篇註解』では、(セプトゥアギンタやウルガタの権威を問うことのない保守的な態度ではあるが)ヘブライ語原典、セプトゥアギンタ、複数のラテン語訳を併記して、言語学的な議論をするなど文献学的手法が採られている。またそこでは、四段階の意味を扱う伝統的な積義体系の枠内で解釈がなされている。このように、ピーコの『詩篇註解』は十五世紀末の聖書解釈の動向——新たに始まった文献学と中世以来の積義学的手法によって詩篇が論じられる——に属し

ているのだが、創世記の註解である『ヘプタプルス』の方は、主題的にも内容的にもそれとは大きく異なっている。創世記は註解の対象としてそれほど一般的ではないし、ヘブライ語原文やセプトゥアギンタへの言及はあるが、それらは解釈を主眼としたものでウルガタの訳文が文献学的に問題とされているわけではなく、また、伝統的積義体系はまったく無視されている。こうして第三章で、『ヘプタプルス』が何でないかの否定的なコンテクストを示して、その差異を浮かび上がらせた後で、第四章以降では『ヘプタプルス』の具体的な内容の分析へと移行し、ここでは、『ヘプタプルス』が属している（と著者が考える）伝統が構成されていく。

『詩篇註解』では四段階の意味に基づく中世の積義学が概ね採用されているが、いくつかの点で伝統的な体系とは異なっている。著者ブラックによれば、ここでピーコはアレゴリーを「再定義」して伝統的積義体系を「拡大あるいは再形成」しようとしており、この方向性が『ヘプタプルス』においてさらに展開され、こちらでは「伝統との決定的断絶」が生じるとされる。確かに『ヘプタプルス』での創世記解釈が伝統的な四段階の意味の積義とは無関係であり、そのためアレゴリーという語が異なる意味で使われているのは事実だが、ピーコが意図的に伝統を練り直して「アレゴリーの新たな概念」を「理論化」したというのは同意しかねる見解である。

第四章は『ヘプタプルス』の第一序文を考察の対象とする。著者はここでのピーコの議論を、聖書の読解の前提となる「秘教主義（エズテリシズム）」——大衆一般と選ばれた少数者という社会的区分と、文字通りの意味と高次の意味という解釈上の区分を重ね合わせる態度を指すとされる——の提示と捉え、このピーコの「秘教的解釈学」のコンテクストを描いていく。

著者ブラックは、第一序文の内容をいくつかの命題にまとめて、それらを『愛の詩註解』、『演説』、『弁明』といった以前の著作と比較照合し、その共通性を示していく。そして、『ヘプタプルス』における創世記解釈の前提となる「秘教的姿勢」は、細部の変更はあるが本質的には以前の著作から一貫していることを明らかにする。次に、このピーコの「秘教主義」がより大きな歴史的背景の中へと入れられる。著者によれば、アレクサンドリアのクレメンスなどの初期ギリシア教父、ネオプラトニズム、中世のユダヤ哲学がこの「秘教主義」の流れを形成している。一方、ピーコと最も近い位置にあるラテン中世のキリスト教にはこの伝統は継承されていないとされる。そして、ピーコとこの「秘教主義の諸伝統」の具体的な文献上の接点として、ディオニュシオス文書やマイモニデスの『迷える者たちへの導き』などが挙げられている。

したがって、『ヘプタプルス』の第一序文における「秘教的態度」は、ピーコの思考において一貫したものであり、より広範な諸伝統との関連においては、ラテン中世のキリスト教よりも初期ギリシア教父に近く、直接的な典拠としてはネオプラトニズムと中世ユダヤ教が考えられる、というのが著者の主張であるが、この章の議論は、様々な制度的・社会的差異を無視して「秘教主義の諸伝統」を強引に設定しているため、説得力に欠けている。そもそも、ここでの分析の出発点である「秘教的解釈学」なるものが、極めて緩い規定しか与えられていないため、類例をいくらかでも見つけられるカテゴリーとなってしまう。そのうえ、こうした不確かな観点から発見された共通性が、歴史的影響関係に拡大されてしまっている。

第五章では、『ヘプタプルス』の第二序文——著者によれば「アレゴリー理論」が展開される本研究における最重要箇所——が扱われる。第二序文でピーコは、『ヘプタプルス』本編での創世記

解釈の基礎となる宇宙論を提示する。それは、天使界・天上界・月下界の序列を伴う三つの世界で構成されていて、さらにこの三つの世界が階層的でありながらも相互に包含関係にあるような宇宙論である。世界がこうした構造であることは、当然、世界の創造を語る創世記の言葉にも記されているので、この宇宙論は同時に解釈を導く理論でもある。実際にはピーコはここで、四つ目の世界であり、他の三つの世界を全て内に含むものとしての人間にも言及しているのだが、著者はこの点を考察の対象とはせず、三分割型宇宙論、世界の相互包含、それに基づくアレゴリー理論の出典を検討していく。

こうした宇宙の三分割という構想は、『愛の詩註解』や『演説』など以前の著作にも見られるものだが、『ヘプタプルス』とは異なり、ここではネオプラトニズムとの関連において論じられていた。しかし、プロティノスやプロクロスなどの具体的なネオプラトニズムの宇宙論と比較してみると、それらはピーコの宇宙論と正確には一致しない。そこで著者は、ピーコの宇宙論とユダヤ思想との親近性を指摘し、ピーコのものに最も近い例として『迷える者たちへの導き』を挙げている。また、階層性を有する宇宙の各部分が相互に対応関係にあるとするピーコの見解は、ネオプラトニズムに一般的なものであるとして、著者はとりわけプロクロスの『神学綱要』を強調する。しかし、古代の異教のネオプラトニズムでは、こうした宇宙論は存在論の枠内でのみ定立されており、解釈学的要素を含まない。この宇宙論が聖書の解釈と関わるようになるのは、ディオニシオス文書のキリスト教化されたネオプラトニズムにおいてであるとして、『神名論』及び『天上位階論』での聖書解釈とピーコの「アレゴリー理論」との関連が示される。

このように宇宙論的・存在論的基礎の上に定立されるピーコの「アレゴリー理論」は、単なる文献解読作業ではなく、聖書の読解という知性による認識作用を通した存在の階層の「上昇」として捉えるべきものであると、著者は主張する。この「知的上昇」が第六章の主題となる。

はじめに、ピーコの知性理解の背景として中世ラテン世界における人間知性を巡る論争、能動知性の唯一性に関するいわゆる「ラテン・アヴェロエス主義」論争が描かれ、一時期パドヴァ大学で学んでいたピーコには「アヴェロエス主義者」との親交もあったことなどが指摘される。次に、「知的上昇」がピーコの諸著作に繰り返し登場する一貫したテーマであることが確認される。『論題集』や『演説』にも見られるが、最も詳細に論じられているのは『愛の詩註解』であるので、これと『ヘプタプルス』とが比較検討され、ピーコの知性理解の輪郭がより詳細に叙述される。それによると、「知的上昇」の果てには、知性を越えた高次の段階、神との合一として描かれる神秘的な最終段階が設定されており、「知的上昇」はその究極的段階へ至るための不可欠の過程であるとされる。

続いて、「知的上昇」のテーマと聖書解釈がどのように関係するかという問題に移り、ゲルソニデスの『雅歌註解』が例として取り上げられる。この著作——ミトリダテスによってラテン語訳された文献の一つで、現存するその写本にはピーコによる書き込みがあり、熱心に読まれたことが分かる——で、ゲルソニデスは神との合一を最終的な目標とした認識作用の漸進的拡大について聖書解釈と絡めながら論じており、ここでは聖書が「知的上昇」の導き手として位置づけられているとされる。しかし結局、ピーコの『ヘプタプルス』において「知的上昇」のテーマと聖書解釈とがどのように関係しているのかを、テキストに即して十分に論じることがなく、著者はこ

の章を閉じている。

『ヘプタプルス』本編の後には補遺のような形で、カバラの技法を用いた創世記解釈が付されている。ここでピーコが行うカバラとは、語を文字に分解してそれを新たに組み合わせ直すことによって別の語を生成させる技法である。具体的には、創世記の冒頭、聖書の冒頭の言葉「ベレシート（はじめに）」——ヘブライ語では六文字——から十二個の単語をつくり、キリスト教の真理を述べる文を生み出している。これに関して著者は、冒頭の語「ベレシート（はじめに）」に全てが含まれているという発想などの点から、レカナーティの『トーラー註解』が重要な出典であろうと指摘している。

『ヘプタプルス』本編は、それぞれ七章から成る七つの註解を含み、7×7の整然とした構成を有している。これは内容上の必然性によるよりも、むしろ構成そのものに対する強い意識によるものである。著者によれば、この構成の要となるのは「シャバト（安息日）」の概念である。その構成にもかかわらず、『ヘプタプルス』は創造の第七の日を註解の対象から外している。ここではシャバトが創造の第七の日の神の安息としてではなく、人間の終極である救済として理解されており、このピーコのシャバト理解はキリスト教よりもユダヤ教の伝統に近いものであると著者は主張する。具体的には、「ヨベルの年」（レビ記 25 章）や「五十の理解の門」（バビロニア・タルムード「ローシュ・ハ・シャナー」篇 21b）と『ヘプタプルス』の7×7の構成との関連が指摘され、その出典としてナフマニデスの『トーラー註解』などが挙げられる。このように第七章では、ピーコのカバラを用いた創世記解釈と『ヘプタプルス』全体の構成に関する分析がなされる。

以上がクロフトン・ブラック『ピーコの「ヘプタプルス」と聖書解釈学』の概要である。いくつもの知的伝統が交叉するピーコの著作の研究にふさわしく、本書においてブラックは多様な文献を渉猟して『ヘプタプルス』の歴史的背景——なかでも特にユダヤ思想を強調している——を浮かび上がらせている。該博な知識に基づく正確な指摘が多くの箇所でなされているのだが、そこから引き出される結論に関しては必ずしも全てが説得的であるとは言えない。こうした印象は第三章以降の議論に常に感じられる。著者による指摘と結論の間の齟齬を以下で具体的に見てみよう。

第三章では、伝統的釈義学と文献学的手法が採用されている『詩篇註解』とそうした要素を欠いている『ヘプタプルス』との比較から、両者は「異なる目的を有する、根本的に異なるタイプの著作である」ことが確認された。しかし著者はこう言いながらも、第四章以降の分析においても聖書解釈という枠組みに固執し続けている。『詩篇註解』と『ヘプタプルス』とを隔てる大きな差異が示唆しているのは、むしろ、後者を聖書解釈とは別の系譜上に位置づける可能性ではないだろうか。また、『ヘプタプルス』の内容に関しては第四章以降で分析されるが、そこではまず、ピーコの「秘教主義」とその伝統が論じられた。ピーコの諸著作に貴族主義的態度が認められるのは確かなのだが、それを「秘教的理論」や「秘教的解釈学」などとして取り出すことの妥当性には疑問が残る。ましてや、古代にまで遡る「秘教主義の伝統」を描くとなると、いっそうの問題があるだろう。非常に抽象的な基準によって取り出された類似性を、伝統や系譜へと不注

意に格上げするのは危険である。続いて、ピーコの「アレゴリー理論」がネオプラトニズムを背景として位置づけられ、ここに著者は存在論と認識論の結合を見て取り、『ヘプタプルス』における創世記の解釈という作業は、聖書解釈を通した宇宙の階梯の「知的上昇」であるとしている。ピーコの諸著作の「一貫した構想」として「知的上昇」のモチーフを指摘することはできるし、大まかな背景としてこうした目的論的枠組みをピーコの思考に認めることはできるが、テキストに即して著者の見解を支持するのは困難である。同様に、『ヘプタプルス』という著作における構成の重要性や、その基礎となるシャバトの救済論的・終末論的理解に関しても、指摘としては正しいが、誇張しすぎている点が多々あると思われる。

このように、あまり賛同できない拡大解釈が散見されるとはいえ、写本も含めた文献資料の読解に基づく本書の研究は基本的には非常に堅実なものである。堅実な研究の常として、本書には様々な制限が課されている。

まず研究対象について言えば、著者自身が第二章で明言しているように、本書は『ヘプタプルス』という著作の研究というより、主にその序論部の研究であって、『ヘプタプルス』の中核をなす本編でのピーコの議論は実質的に考察の対象とされていない。この前提となっているのは、序論部で提起された「理論」が本編で「実践」されるという著者の理解である。しかし、この「理論と実践」という見立ての有効性はそう確かではない。そもそも序論部を一つの「理論」としてまとめられるのかという問題がまずあり、さらに、序論部での議論と本編での解釈作業との関係を「理論と実践」と捉えることについても疑問が残る。

本書の研究手法の中心となるのは『ヘプタプルス』の「コンテクスト化」であり、ピーコの他の諸著作と、より広範な歴史的背景という、ピーコの内部と外部の二重の「コンテクスト」のうち『ヘプタプルス』を位置づけて論じている。しかしその際、ピーコの他の著作として取り上げられるのは、『ヘプタプルス』以前の著作に限られていて、それ以降のものはほとんど触れられない（執筆年代も近く、いくつかのテーマに共通性が見られる『存在と一について』が扱われていないのは少々残念である）。というより、本書が描く「コンテクスト」は『ヘプタプルス』以前の歴史のみであり、それ以降の展開は全て対象外となっている。また、時には古代にまで遡る広大な歴史的コンテクストが考慮に入れられている一方で、当時の北イタリア諸都市やフィレンツェの知識人サークルといった、ピーコが第一に属していたと思われる比較的ローカルな空間はあまり問題になっていない。

以上のような限界があるとはいえ、ピーコ・デッラ・ミランドラの総合的理解のために不可欠である——にもかかわらず集中的に研究されることがほとんどなかった——『ヘプタプルス』という著作を、広範囲にわたる領域の文献と関連付けて論じている本書の功績は大きいだろう。